

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書

奄美と学ぶ，奄美で学ぶ

～観光英語・異文化教育アイランドキャンパスプログラム～

実施場所： 奄美大島（奄美市・龍郷町・瀬戸内町）

事業責任者

鹿児島県立短期大学

文学科 英語英文学専攻

石井 英里子

令和8年2月27日





アイランドキャンパス事業の採択が決まった日、鹿児島県立短期大学にて

はじめに

奄美大島には、世界自然遺産に登録された豊かな自然と、独自の食文化や「結い」の精神に根ざした暮らしがある。子どもたちはその文化の中で育ち、地域のことをよく知っている。一方で、島内には大学がないため、大学生と直接ふれあう機会がめったにない。

このプログラムには、二つの出発点がある。一つは、私たちが鹿児島県立短期大学（県短）の学生であるということ。鹿児島の県立の大学で学びながら、同じ県内の奄美大島のことをほとんど知らない。大好きな鹿児島なのに、その豊かな文化を体験したことがない。鹿児島の学生だからこそ、今この時に自分の目で見て、肌で感じたいという思いがあった。もう一つは、奄美の子どもたちには、伝えるべきものがすでにあるということである。島の食文化や自然について、子どもたちは私たちよりもずっとよく知っている。

年齢も背景も異なるこの二つの集団が出会い、互いに教え、教わるとき、双方に深い学びが生まれるのではないか。そうした期待を持って、県短の学生8名が奄美大島を訪れ、6校の小・中学校で延べ約300名の児童生徒と異文化交流ワークショップを行った。子どもたちが奄美の食文化や自然について大学生に教え、大学生はそれを英語で表現する手助けをする。この双方向の学びの場をつくることが、本事業の目指したことである。異文化コミュニケーションや教育学の研究知見も参考にしながら、子どもたちの「伝えたい」という気持ちを出発点にプログラムをデザインした。

本報告書では、令和7年度の事業の全体像を示した上で、協力校の先生方と参加学生へのアンケート調査の結果を中心に、事業の成果と課題を報告する。初年度の取り組みから見えてきたことを率直にお伝えし、次年度に向けた改善の方向性を示したい。

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書
奄美と学ぶ、奄美で学ぶ～観光英語・異文化教育アイランドキャンパス～
鹿児島県立短期大学



龍瀬小の児童のみなさんと一緒に

1. 事業の概要

1.1 事業の目的

本事業は、世界自然遺産に登録された奄美大島の自然環境と独自の文化を教材として活用し、大学生と地域の児童生徒が双方向の学びを実践する教育プログラムである。以下の三つを目的としている。

(1) 児童生徒の英語力と地域文化の発信力の育成 奄美の食文化・自然・観光について、児童生徒が英語で伝える力を育てる。子どもたちが教える側に立つことで、英語への意欲と地域への誇りを同時に引き出すことを目指した。

(2) 学生のファシリテーション力と異文化理解力の育成 教育の専門家ではない大学生が、子どもたちとの関わりの中でファシリテーション力を磨き、異文化理解を深める。複数の学校でファシリテーションを繰り返す中で、実践的な力を着実に伸ばしていく。

(3) 離島地域の教育資源の充実と地域振興への貢献 大学がない奄美大島において、大学との連携そのものが教育資源となる。大学生がロールモデルとなり、子どもたちの将来の選択肢を広げるとともに、地域文化を英語で発信する力を育てることで、地域の国際化と観光振興にもつなげていく。

1.2 教育的アプローチの背景

本プログラムのデザインにあたっては、事業責任者の専門である異文化教育学・英語教育学・教育方法学の知見を活用している。

その中心となるのは双方向学習、つまりコミュニケーションを通じた学びあいの考え方である。一般的な英語教育では、教える側と教わる側が固定されがちだが、本プログラムでは子どもたちが奄美の文化について大学生に教える場面を意図的に設けている。自分が知っていることを誰かに伝えるという喜びが、英語で表現しようとする意欲を自然に引き出す。これは、第二言語習得研究で重視されるコミュニケーションの必然性を、地域文化というリアルな素材を通じて生み出す仕組みである。

また、経験学習の理論（Kolb, 1984）も参考にしている。学生たちは学校を回らる中で、少しずつ形の異なるワークショップを繰り返し、毎回の振り返りを通じてやり方を改善していく。「体験→振り返り→改善→次の実践」というこのサイクルが、学生たちの成長を支える仕組みになっている。

さらに、大学生を先生ではなく、年齢の近いお兄さん・お姉さんとして位置づけている。教育の専門家ではないからこそ、子どもたちとの間に自然な関係が生まれ、年齢の近さが持つ教育的な価値を活かすことができると考えている。

1.3 実施体制

教員	1 名
参加学生	8 名（英語英文学専攻 2 年生・異文化コミュニケーションゼミ、うち 1 名は奄美大島出身）
協力校	3 市町村 6 校（児童生徒の数：延べ約 300 名） 奄美市：朝日小学校、小宿中学校、朝日中学校 龍郷町：龍瀬小学校、龍南中学校 瀬戸内町：古仁屋小学校

1.4 事業の経過

本事業は当初、4 期に分けて実施する計画であった。しかし、令和 7 年 8 月～9 月に実施機関である大学の事情により事業責任者が海外研修引率を担当することとなり、第 1 期（教材開発準備）および第 2 期（9 月の奄美サテライト講座・現地調査）の実施スケジュールを変更せざるを得なくなった。当初 9 月に予定していた大人向け観光英語講座（奄美サテライト講座）は実施を見送り、現地調査は 10 月に延期して実施した。

限られた準備期間の中ではあったが、学生たちと協力して表 1 に示すスケジュールで事業を進めた。

表 1. 本事業の時期と活動内容

時期	活動内容
令和 7 年 8 月～9 月	第 1 回フィールドワークの準備（事業責任者が海外研修引率のため、学生主導で進めた）
令和 7 年 10 月 22～27 日、 10 月 30～11 月 1 日	第 1 回奄美大島滞在（約 1 週間）（観光施設・文化施設でのフィールド調査、協力校との打合せ、ワークショップ素材の収集）
令和 7 年 10 月～11 月	フィールド調査結果に基づく教材開発、ワークショップのデザイン・リハーサル）
令和 7 年 12 月 9～14 日	第 2 回奄美大島滞在（約 1 週間）（3 市町村 6 校での英語ワークショップ実施、キルギス国立大学学生との交流、龍瀬小学校でのキャリア教育
令和 8 年 1 月～2 月	振り返り合宿、アンケート調査の実施・分析、報告書作成

2. フィールド調査と教材開発

2.1 10月のフィールド調査

10月の奄美大島滞在では、観光施設における外国人対応の実態調査、ワークショップで使用する教材の素材を収集、そして何より奄美大島を訪れたことがない学生が島を体験するために、3名の学生（うち1名は奄美大島出身）たちとともにフィールド調査を行った。奄美大島各地の観光施設・文化施設を訪問しアンケートやインタビュー調査を行うとともに、奄美の食文化、自然環境、観光資源について現地で学んだ。訪問した施設一覧を表2に示す。

表2. 訪問先一覧

日付	番号	施設名	種別
10/22	1	タビビトノキ奄美	カフェ
	2	エアポートショップありむら	お土産
	3	まえだ屋	お土産
10/23	4	黒潮の森 マングローブパーク	観光施設
	5	マングローブ館お土産コーナー	お土産
	6	マングローブ館レストラン	レストラン
	7	THE SCENE	ホテル
	8	せとうち海の駅 お土産ショップ	お土産
	9	せとうち海の駅 大島紬屋さん	お土産
	10	LUANA crepe	カフェ
	11	とよひかり珈琲店	カフェ
	12	ケンムンの館	お土産
	13	開運の郷 やけうちの宿	ホテル
	14	奄美アイランド	観光施設
	15	アクアダイブこほろ	観光施設
10/24	16	アルマール	カフェ
	17	味の郷 かさり	お土産
	18	みしょらん Café (あやまる岬)	お土産・カフェ
	19	スマイルフィッシュ	レストラン
	20	コーラルバームス	ホテル
	21	レストラン&レスト 翔	ホテル・レストラン
	22	ゲストハウスあまてらす	ホテル
	23	あやまるドーム	ホテル
	24	ダイビングショップ ネバーランド	観光施設
	25	まえだ屋 ブルーシール	カフェ
	26	まえだ屋 お土産本店	お土産
10/25	27	奄美パーク 売店	お土産
	28	奄美パーク レストラン ISSON	レストラン
	29	奄美パーク 受付 (事務所)	観光施設
	30	island time	レストラン
	31	味の郷かさり	お土産
	32	宿 AMAMI 笑 (アマミエ)	ホテル
	33	ティダムーン	ホテル
	34	原ハブ屋 奄美	お土産・観光施設
	35	オーシャンズ	観光施設
	36	ばしゃ山村 (浜やどり)	ホテル
	37	ばしゃ山村 (島おこし市場)	お土産
10/26	38	奄美野生生物保護センター	観光施設
	39	QuruGuru アマミノクロウサギミュージアムくるぐる	観光施設
	40	ごはんカフェ AMABOSHI	レストラン
	41	ハナハナリゾート 事務所	観光施設
	42	ハナハナリゾートはまぶちどまり	観光施設

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書
奄美と学ぶ、奄美で学ぶ～観光英語・異文化教育アイランドキャンパス～
鹿児島県立短期大学



アンケート調査の様子



奄美市立朝日中学校校長室にて



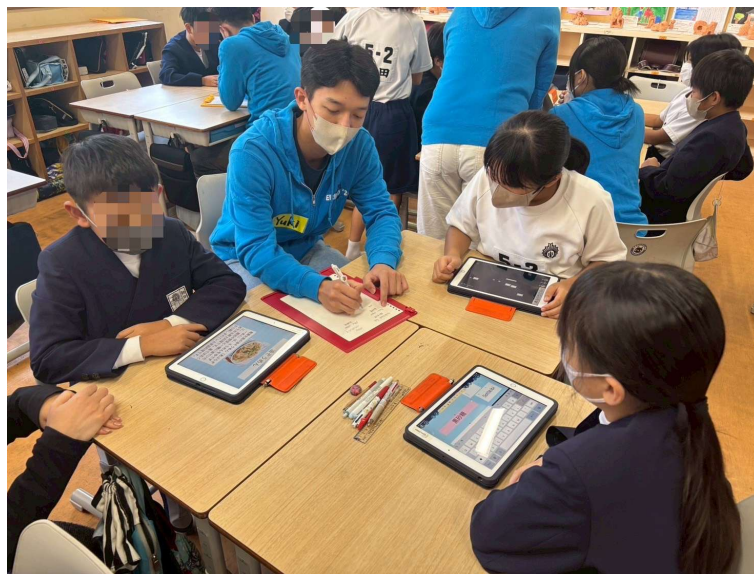
大島紬 三代目仁左門工房 | 原絹織物にて

2.2 教材開発とワークショップのデザイン

ワークショップのテーマ（食文化・自然環境・観光）は協力校の先生方からいただき、それぞれの学校の要望や授業の流れに合わせて、学生たちと協働で教材を開発した。結果として、大きく3つの形式のワークショップが生まれた。

（1）探究発表サポート形式（朝日小）

朝日小学校では、前の学期の探究の時間で児童がすでに食・自然・観光地について調査を進めていた。ワークショップでは、各クラスにこの3つのテーマが混在する形で、グループごとに児童がプレゼンテーションを行い、大学生はその内容を「外国人に伝えるならどう言えばいいか」という視点から英語表現をサポートした。大学生たちは事前に、児童がどのようなプレゼンテーションを準備してくるかを予想し、想定される内容に対応する英語表現を可能な限り用意して臨んだ。児童の学びの蓄積を出発点にした、双方向性の高い形式である。

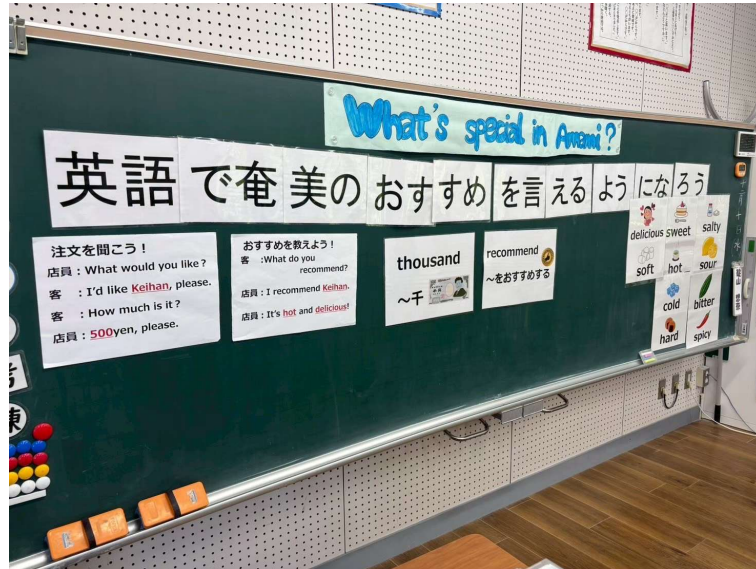


朝日小での探究発表——児童のプレゼンを大学生がサポートする場面

（2）レストラン形式（龍瀬小・古仁屋小・小宿中・朝日中）

奄美の伝統料理（鶏飯、油豆腐めんなど）をメニューに見立て、レストランで食事を注文し、金銭のやり取りをするロールプレイである。ここで大切にしたのは、おすすめメニューを児童生徒自身に選ばせることである。自分が好きな奄美の料理を選び、その魅力をお客さんに伝えるという場面を設けることで、児童生徒は自然と自分の言葉で地域の食を説明し始める。お客さんと店員さんの役割を交代しながら、奄美の食を英語で紹介する体

験ができるようにデザインした。なお、龍瀬小学校ではこれに加えて、大学生によるキャリア教育の時間もいただいた。



レストラン形式のロールプレイで使用した教材 1



レストラン形式のロールプレイで使用した教材 2



レストランのロールプレイ活動の様子

(3) カード対話形式（龍南中）

奄美の食文化と自然環境をテーマに、写真入りのカードを作成した。大学生がカードの写真を見せながら英語で問いかけ、生徒が答えるという対話型の活動である。テーマだけをいただいた中で、できるだけ多くの質問を事前に用意して生徒の対話を引き出すことを重視してデザインした。

いずれの形式にも共通しているのは、子どもたちが知っていることを出発点にしている点である。知らない英語を一方的に教え込むのではなく、自分たちの地域のことを伝えたいという気持ちから英語表現を学んでいくという順序が、本プログラムで最も大切にしていることである。



龍南中でのカード対話の様子

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書
奄美と学ぶ、奄美で学ぶ～観光英語・異文化教育アイランドキャンパス～
鹿児島県立短期大学



カード教材

3. ワークショップの実施

3.1 実施の概要

12月の奄美大島滞在中、3市町村6校で計9セッションのワークショップを実施した。各セッションは約1時間で、学生8名がファシリテーターおよびサポーターとして児童生徒と関わった。学校ごとに2.2で述べた形式に沿って進め、児童生徒の学年や人数に合わせて英語の難易度やファシリテーションの仕方を調整した。

3.2 セッションを重ねる中での成長

本事業では、3つの形式を用いながら6つの学校でワークショップを実施した。学校ごとにテーマや形式は異なるものの、ファシリテーションの基本的な進め方（自己紹介、アイスブレイク、活動、振り返り）は共通しており、学生たちはセッションを重ねるごとに自分たちの動きを改善していくことができた。



龍瀬小でのワークショップの様子

学生たちにとって、セッションを重ねることは、毎回の実践を振り返り、やり方を改善していく実践のサイクルを経験することだった。たとえば朝日小学校では3時間連続でワークショップを行ったため、同じ学校の中でもセッションごとにファシリテーションが目に見えて改善されていった。龍南中学校でも2クラスに分かれてそれぞれ2回ずつ実施し、セッションの間に1コマ空き時間があったため、そこで振り返りと修正を行ってから次のセッションに臨むことができた。ある学生は「毎回の授業で最低でも2つくらいは改善点が見つかって、リピートの大切さを感じた」と振り返っている。最初のセッションで

は原稿を見ながら進めるのに精一杯だった学生たちが、最後のセッションでは子どもたちの反応を見ながら柔軟に対応できるようになっていた。この変化を、学生自身が実感していたことが、後述するアンケート結果からも確認できる。



古仁屋小学校でのワークショップで積極的に手を挙げる児童たち

3.3 キルギス国立大学学生との交流

奄美滞在中、観光施設でインターンシップをしていたキルギス国立大学の学生と交流する機会を設けた。当初計画にはなかった出会いだったが、同世代の若者との交流は、結果として深い学びの場になった。

キルギスの学生は日本語以外にキルギス語とロシア語を話し、英語はほとんど話さなかった。学生たちは「海外の人は英語を話せると思っていた」という思い込みに気づき、「やさしい日本語」で会話することの大切さを実感した。同世代の若者が異国の地で観光業に携わっている姿は、観光と英語、異文化理解という本事業のテーマが現実の中でつながる場面でもあった。



キルギス国立大学の学生との交流

3.4 龍瀬小学校でのキャリア教育

龍瀬小学校では、英語ワークショップに加えて、大学生によるキャリア教育の時間もいただいた。学生たちが日本語で、大学での学びや進路選択について子どもたちに話す機会となった。協力校アンケートでも「学生さんからキャリアについてお話を聞いたこと」が最も意義のあった点として挙げられており、次年度に向けてこの要素を充実させたいと考えている。



龍瀬小でのキャリアの時間の様子

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書
奄美と学ぶ、奄美で学ぶ～観光英語・異文化教育アイランドキャンパス～
鹿児島県立短期大学



児童から大学生への質問が止まらなかった

4. 協力校のアンケート結果からみる事業の成果

令和7年12月に実施したアイランドキャンパス事業の異文化交流ワークショップについて、協力校を対象にアンケート調査を実施した。調査はFAXにより令和8年2月3日から2月26日にかけて行い、3市町村の全6校から回答をいただいた。なお、同一校から複数の回答があった場合は学校ごとに集約し、6校のデータとして集計している。

4.1 ワークショップ後の児童生徒の変化

ワークショップを通じて児童生徒にどのような変化が見られたかについて、複数選択で回答をお願いした。結果を表3に示す。

表3. ワークショップ後の児童生徒の変化

項目	選択数	%
大学生との交流による刺激	6/6	100
英語で地域を紹介・説明する意欲や能力の向上	4/6	67
地域の自然・食文化・観光への誇りや興味の深まり	4/6	67
英語コミュニケーションへの積極性の向上	4/6	67

大学生との交流による刺激は全6校が選択し、唯一の全校一致項目となった。奄美大島には大学がなく、児童生徒にとって大学生と直接ふれあう機会がめったにない。そうした環境だからこそ、大学生の存在そのものが子どもたちにとって大きな刺激になったのだと感じている。また、英語や地域文化に関する3つの項目もいずれも3分の2以上の学校に選ばれており、英語面・文化面の両方にわたって変化が生まれていたことがうかがえる。

児童生徒の変化に関する最も印象的だったエピソードとして、以下のような声が寄せられた。

島外の大学生が来て、中学生にとって新鮮でみんな楽しそうに受けていました

普段接する機会の少ない高等教育機関の学生との交流を通して、より意欲的に学ぼうとする姿が多くみられた。

生徒たちはとても楽しそうで、たくさんの大学生たちと関わって、英語でがんばってコミュニケーションを取ろうとし、意義のある時間となりました。

英語が苦手な子が「自分も英語話せた～」とうれしそうに言っていたこと。

大学生との交流で、いつも触れ合うことのない人たちとコミュニケーションを取ることができて楽しそうだった。

奄美大島の良さを伝えたいという意欲が高まっている姿があった。それ以上に、大学生が学んでいることや見ている世界への興味関心が高いのが印象であった。

奄美大島を知らない学生とともに学んだことで、児童が奄美大島の魅力をなんとかして伝えようとする姿が多く見られた。年齢が近い存在として、自分も大学等で学びたいという思いをもった子たちがいた。

これらの声から、大きく二つのことが見えてくる。一つは、大学生との出会いそのものが持つ力である。島に大学がないからこそ、大学生は子どもたちにとって身近なロールモデルになり、「自分も大学で学びたい」「もっと知りたい」という気持ちを自然に引き出していた。もう一つは、双方向の学びの効果である。子どもたちが奄美の文化について大学生に教える側に立ったとき、地域への誇りと英語で伝えたいという意欲が同時に生まれていた。この二つの力が重なり合うところに、本事業ならではの教育的な意味があると考えている。

4.2 本事業の教育的意義

本事業の教育的意義について、複数選択で回答をお願いした。結果を表4に示す。

表4. 本事業の教育的意義

項目	選択数	%
大学生との交流による刺激や将来への視野拡大	5/6	83
児童生徒の英語コミュニケーション能力の向上	4/6	67
地域文化への誇りや関心の深まり	4/6	67
大学との連携による離島教育資源の充実	3/6	50

ここでも大学生との交流に関する項目が最も多く選ばれた（83%）。4.1が当日の変化を尋ねたのに対し、4.2では将来への視野拡大という、より長期的に見た意義が加わっている。回答の中に「ただの交流というだけでなく、生きた財産になる」という言葉があったが、これはまさに本事業が目指していたことでもある。たった数十分の交流であっても、子どもたちの未来に何かを残せる可能性がある。そのことを協力校の方々にも感じていただけたことは、大きな手応えであった。

また、大学との連携による離島教育資源の充実を半数の学校が選んでいることも注目したい。離島に大学がないという環境の中で、大学との連携そのものが教育資源として意味を持つという認識が、現場でも共有されていることを示している。

事業の最も意義があった点に関する評価では、以下のような声が寄せられた。

学びをしない子どもたちが楽しそうで印象的でした

英語に対する興味・関心の向上。

生徒自身が奄美の食べ物や動物について大学生に教える場面もあり、自分の生まれた地域に誇りを持っている場面が見られた。

学生さんからキャリアについてお話を聞いたこと。

奄美独自の食文化について考える機会になった。

島外の近い年齢の人（島内に少ない年代）と関わることで子供の学びに対する意欲が高まり、より調べたいという思いも見られたことから教育資源の充実の効果があると考え

る。

4.3 離島地域の活性化への貢献度

本事業が離島地域の活性化にどの程度貢献できたかについて、6段階（1：全く貢献しない～6：非常に貢献する）で評価をお願いした。同一校から複数の回答があった場合は学校ごとに平均値を算出し、6校のデータとして集計した。結果を表5に示す。

表5. 本事業の離島地域の活性化への貢献

評価	校数	割合
6（非常に貢献する）	3	50%
5	2	33%
4	0	0%
3未満	1	17%
平均値		5.13

6校の平均は6点満点で5.13であり、多くの協力校から高い評価をいただいた。半数の3校が高い評価の6、2校が5であり、本事業が離島地域の活性化に貢献し得るという認識を広く共有していただけたことは心強い結果であった。

一方で、評価が低かった協力校からは「事前の打合せや事後の振り返りがあまりなく、児童にとっては『大学生と触れ合った時間』としてしか印象に残らなかったように思う」という率直な声もいただいた。この指摘は真摯に受け止めている。事前の連携を丁寧に行うことで、ワークショップの教育的な効果をより確かなものにできるはずであり、次年度に向けた最も重要な改善点だと考えている。

離島地域の活性化への貢献度に関する評価理由は、次のような声が寄せられた。

大学生になりたいと思った子もいたかもと感じました

人的・物的資源が限定的である離島において、このような機会がただの交流というだけでなく、生きた財産になると考えるため。

離島地域の活性化…と言われると正直分かりかねるが、大学生に離島の良さを知ってもらいつつ勉強してもらえるとありがたい。

島で生活する小学生は大学生くらいの年代の方と関わる機会がめったになく、今回とても刺激を受けている様子だったから。

事前の打合せや事後の振り返りがあまりなく、児童にとっては「大学生と触れ合った時間」としてしか印象に残らなかったように思うため。

島外の児童がもっとも交流しやすい年代の学生と奄美大島特有の文化や自然に関して交流することで児童の郷土愛を育むと共に学生の発信内容にも影響を与え効果大

本年度が初めての取り組みであったので事前の打ち合わせや準備が十分にできていなかったため、児童がどのように対応してよいか躊躇してしまった。継続的に実施すれば、内容の精選がはかれたり、効果的な方法が生み出せたりすると考える。

4.4 次年度への提案

協力校から寄せられた次年度への提案を以下に示す。

大学生になって楽しいことや入るための進路選択の仕方も教えてもらえると中学生がどのような高校生になりたいかのイメージもてるのかと思いました

とにかく子どもたちと学生さんたちがたくさん交流できる内容だと嬉しいです。子どもたちは、もっと話を聞いてみたい！！という感じでした。

事前打ち合わせや事後の振り返りを充実させ、授業時間についても事前に十分な調整を行う必要がある。

学生の質の向上

年間に複数回交流を行うとよいと考える。実際の訪問は1回だとしても事前にオンラインで課題を提示したり共有したりして、その後双方の探究的な学びにつなげることで学生にとっても児童にとっても協働や課題追究に関わる資質能力が高まる。本プログラムを発展させることで、人と自然が共生し人と人が助け合う「結い」の精神が残る場所で、これからの時代に必要な多様性の包摂の在り方を学ぶ場として奄美大島の良さを発信できると考える。可能であれば継続したい。

5. 参加学生のアンケート結果からみる事業の成果

アイランドキャンパス事業に参加した英語英文学専攻2年生8名を対象に、事業全体を振り返るアンケート調査を実施した。調査はGoogleフォームにより行い、全8名から回答を得た。8名のうち1名は奄美大島出身であり、残りの7名は本事業で初めて奄美大島を訪れている。

アンケートは、自由記述と6段階評価（1：全くそう思わない～6：非常にそう思う）の両方で構成した。以下では、数値データの集計結果と、自由記述から見えてきたことを整理していく。

5.1 事業の教育効果に関する評価

本事業の教育効果について尋ねた10項目の結果を表6に示す。

表6. 本事業の教育効果

項目	平均
「双方向学習」は、従来の一方的な英語授業よりも効果的だと感じた	5.88
複数の学校でセッションを重ねることで、自分のやり方が改善された	5.75
離島に大学がない中で、このような大学連携プログラムは地域にとって意義がある	5.75
児童生徒が奄美の自然・食文化・観光に誇りを持つ姿が見られた	5.38
大学生（年齢の近いロールモデル）が関わることで、児童生徒に良い刺激を与えられた	5.38
児童生徒の英語で話そうとする意欲が高まる様子を感じた	5.25
この事業は奄美の地域振興に貢献できると思う	5.25
この経験は、将来の自分のキャリアに活かせると思う	5.13
自分自身のファシリテーション能力が向上した	5.00
奄美の文化や地域の課題についての理解が深まった	5.00

全10項目が5.00以上であり、学生たちの手応えの大きさが数字にも表れている。

最も高かったのは、双方向学習の効果（5.88）で、8名中7名が最高の6をつけた。子どもたちが奄美の文化を教え、大学生が英語を教えるという仕組みが、学生自身にとっても確かな手応えのあるものだったということである。

次に高いのはセッションを重ねることで改善された（5.75）であった。6校を回って異なる児童生徒を相手にファシリテーションを繰り返す中で、自分たちのやり方が目に見えて良くなっていく経験が、学生にとって大きな学びになっていた。ある学生は「毎回の授業で最低でも2つくらいは改善点が見つかって、リピートの大切さを感じた」と振り返っている。

大学連携プログラムの意義も同じく高い評価を得た（5.75）。島に大学がない中で、自分たちが直接地域に入って教育活動を行うことの意味を、学生たち自身がしっかり感じ取っていたことがわかる。

5.2 自己成長に関する評価

本事業を通じた自己成長について尋ねた8項目についての結果を表7に示す。

表7. 本事業を通じた自己成長

項目	平均
状況に応じて柔軟に対応する力	5.50
チームメンバーと協働する力	5.50
異文化を理解し尊重する力	5.50
グループ活動をファシリテーションする力	5.38
教材や活動を臨機応変に調整する力	5.13
人前で話す自信	5.13
児童生徒の理解度を把握する力	4.88
英語でコミュニケーションする力	4.63

トップに並んだのは、柔軟に対応する力、チームで協働する力、異文化を理解し尊重する力の3つでいずれも5.50であった。本事業が単なる英語の実習ではなく、予想外の状況

にチームで向き合い、乗り越えていく総合的な経験として受け止められていたことが読み取れる。

一方、英語でコミュニケーションする力は最も低い自己評価となった(4.63)。学生たちの自己評価が厳しい面もあるが、ファシリテーションや子どもとの関わり方の成長に比べて、英語力の伸びは実感しにくかったのだと思われる。ワークショップの中で学生自身ももっと英語を使う場面を増やすことは、次年度に向けた重要な工夫のしどころである。

5.3 双方向学習の効果

本事業の中心にあるのは双方向学習の仕組みについて、学生たちがどのように感じていたかを紹介したい。

まず、児童生徒が教える側に立ったときについて、学生たちが最も生き生きと書いていたのは、子どもたちが奄美の文化について教える側になった場面のことであった。

教えている時よりも口数が多かった。教える立場になったことで、話そうとしてくれていたのだと思う。

目が輝いていた。一人一人が奄美の文化に誇りを持っているように感じた。「何でも質問して!」という姿勢が印象的だった。

プレゼンをする前と後では表情が全く違った。終わった後は自信がついたような表情だった。

想定していたよりもしっかりとしたプレゼンを作ってくれていて、ヤンチャなイメージだったのがかっこよく見えた。

子どもたちは、英語を教わる受け身の時よりも、奄美について教える側に立ったときのほうがずっと積極的だった。自分の知っていることを誰かに伝える喜びが、子どもたちの姿勢を変えていた。こうした変化を複数の学生がそれぞれ別の学校で感じており、双方向学習の仕組みがねらい通りに機能していたと考える。

一方、大学生が教わる側に立ったときについて、学生たち自身も、教わる側に回ることで多くの気づきを得ていた。

インターネットで調べるだけでは得られない情報があり、現地の人に教えてもらうことの大切さを学んだ。

授業は教える側だけでなく、教わる側も一緒に作り上げていくものだと実感した。

奄美出身の自分でも、知っているつもりで知らなかったことが多く、子どもたちから新しい視点をもらえた。

最後の声は奄美出身の学生のものである。地元で育った学生ですら、子どもたちの視点から新しい発見がある。このプログラムが大学生から子どもへの一方通行ではなく、お互いに学び合う場になっていたことを、よく表しているエピソードだと思う。

双方向学習についての学生の声は以下のようなものがあった。

「教える、教わる」が一方向にならず、対等なコミュニケーションが生まれた。

子どもたちの「伝えたい」「知ってほしい」という気持ちが、結果的に英語を使う方向に結びついていった。

一方的な授業では理解したつもりで終わってしまうが、双方向学習では相手に自分の言葉で伝えなければならないので、理解しようとする姿勢が見られた。

身近なものから英語に触れることで、日常での英語への意欲が高まったと思う。

双方向学習の効果が高い評価（5.88）を得た背景には、こうした実感がある。子どもたちにとって英語は教わるものから伝えるための道具に変わり、大学生にとっては教えることと学ぶことが同時に起きる経験になっていた。

5.4 大学生というロールモデルの効果

協力校アンケートでは、大学生との交流による刺激が全校一致で選ばれていたが、学生たち自身も年齢の近さがもたらす効果を実感していた。

先生ほど年が離れていないので、友達みたいな関係を築けた。それが学習にいい影響を与えてくれたと思う。

お兄ちゃんお姉ちゃん的な存在として気軽に会話できたので、英語をより身近に感じてもらえたと思う。

「先生」ほど大人ではないが「友達」としては少し大人すぎるくらいの、ちょうどいい距離感が話しやすさにつながった。

最近の流行について話しかけてくれた小学生がいて、少し乗ってあげると距離が一気に縮まった。

学生たちが語る、お兄ちゃんお姉ちゃんや友達という感覚は、実は最初にワークショップの協力をいただいた朝日小学校で、事前にいただいたアドバイスがきっかけだった。約1時間という短い時間の中で子どもたちも緊張している、そこにぐっと距離を詰めていくには、視線を合わせて、お兄ちゃんお姉ちゃんや友達のような感覚でどんどん入り込んでいってほしい。そう助言をいただいたことが、学生たちの関わり方の土台になった。この

年齢の近さが生む親しみやすさは、専門性とは異なるけれども、同じくらい大切な教育的価値を持っていると感じている。

一方で、課題も見えた。ある学生は「大学生では生徒をまとめきれなくなってしまうこともあった」と正直に振り返っている。年齢が近いからこそその親しみやすさは、場をコントロールする難しさにもつながる。このバランス感覚は、事前の準備やファシリテーション訓練を通じて、次年度さらに磨いていきたい点である。

5.5 離島での大学連携プログラムの意義

奄美大島には大学がない。このことの意味について、学生たちはそれぞれの言葉で振り返っている。

大学がないということは大学生と直接かかわる機会も少ない。自分たちの経験を伝えることで、子どもたちの人生の選択肢を増やすことにつながると思う。

大学生は先生とも大人とも少し異なる、子どもたちの将来に近い存在。専門性を身につけながらも、小中学生の頃を鮮明に思い出せる大学生だからこそ、子どもたちの目線に近い形で関われる。

奄美出身の自分にとって、高校生の時に「なぜ奄美に大学がないのだろう」と思っていた。このプログラムは島の子どもたちにとって、大学をより身近に感じられるきっかけになると思う。

3つ目の奄美出身の学生の言葉には特別な重みがある。島で育ち、進学のために島を出た経験があるからこそ、大学生が島に来ることの意味を実感として語ることができる。この学生は振り返りの中で「自分の地域に誇りを持つこと、そしてその魅力を外に向けて伝えていく役割を担える存在になりたい」とも綴っている。本事業が目指す人材育成の姿が、この一文に凝縮されているように感じる。

5.6 学生自身の成長

6校を回る中で、学生たちのファシリテーションの動きは目に見えて変わっていった。

最初は原稿を見ながら進めるのに必死だったが、後半は余裕が生まれ、生徒からの質問にも答えられるようになった。

最初は授業の通りに進めることばかり考えていたが、後半は生徒の理解度や進み具合を一番に考えるようになった。

喋らない子にはYES/NOで答えられる質問をして、まず「答えられた」という成功体験を作るようにした。

同じワークショップを異なる学校で繰り返すという構造が、学生たちにとって、やってみて、振り返って、次に活かすというサイクルになっていた。セッションを重ねることで改善されたが高い評価（5.75）を得た背景には、こうした積み重ねの実感がある。

最も成長した点への回答は一人ひとり異なっていたが、共通していたのは、計画通りにいかない状況を乗り越える力の向上であった。

チームで全体を動かす力。各グループの大学生にどう動いてもらうか、小学生にどんな指示を出せばいいかを学んだ。

臨機応変に対応する力。準備した通りに進まないことも多く、回数を重ねるごとに対処できるようになった。

いろいろな人に話せる力。話しやすい人だけでなく、無口な子にも同じように接することができるようになった。

こうした力は教室の中だけでは身につかない。本事業の支援によって、短大の2年間という限られた時間の中で、こうした本物の経験を学生に提供していただいたことの意義は大きいと感じている。



ワークショップ直前の打ち合わせの様子

5.7 キルギス国立大学学生との交流

奄美滞在中、観光施設でインターンシップをしていたキルギス国立大学の学生と交流する機会があった。当初計画していたものではなかったが、同世代との異文化交流は結果として深い学びの場になった。

海外の人は英語を話せると思っていたが、キルギスの学生はキルギス語とロシア語だけだった。「やさしい日本語」で会話することの大切さを実感した。

食事のマナーの違いに驚いたが、何が正しいかではなく、当たり前は人によって違うのだと改めて感じた。

同世代のキルギスの学生が異国の地で働いている姿を見て、自分たちも視野を広げなければと思った。

この出会いは、観光と英語、そして異文化理解という本事業のテーマが現実の中でつながる場面であった。次年度もこうした交流の機会を意識的に設けていきたいと考えている。

6. まとめ

6.1 成果

協力校と参加学生の両方のアンケートを通じて、本事業の成果として以下の三つの点を確認することができた。

第一に、大学生との交流が持つロールモデルとしての効果である。協力校アンケートでは、大学生との交流による刺激が全6校一致で選ばれ、学生アンケートでは、大学連携プログラムの意義が5.75の高い評価を得た。島内に大学がない奄美大島では、大学生という存在そのものが子どもたちにとって新鮮であり、将来の自分を思い描くきっかけになっていた。この出会いの力は、本事業が当初想定していた以上に大きなものであった。

第二に、双方向学習が英語への意欲と地域への誇りを同時に引き出す効果を持つことが確認された。学生アンケートでは、双方向学習の効果が全項目中最高の5.88であった。協力校からも「児童が奄美の魅力をなんとかして伝えようとする姿が見られた」という報告が寄せられた。子どもたちが教える側に立つことで生まれる主体性は、従来の一方的な英語教育では実現しにくい、このプログラムならではの成果である。

第三に、繰り返しの実践が大学生の確かな成長をもたらしたことである。6校を回る中で、学生たちはファシリテーション能力を着実に高め、セッションを重ねることで改善された(5.75)という高い実感を得ていた。短大の2年間という凝縮された学びの中で、こうした本物の経験を提供できたことは、高等教育機関としての重要な成果だと考えている。

6.2 課題と次年度への改善

同時に、初年度だからこそ見えてきた課題もある。最も大きな課題は、協力校との事前連携の充実である。本年度は、大学の事情により事業責任者が海外研修引率を兼務することとなり、当初予定していた8月・9月の準備期間が使えなくなった。そのため、限られた期間での実施となり、十分な事前打合せができなかった学校もあった。協力校アンケートでは「事前の打ち合わせや準備が十分にできていなかったため、児童がどのように対応してよいか躊躇してしまった」という声が寄せられている。この指摘は、裏を返せば、事前の共通理解を丁寧に築くことで、子どもたちがより安心して、より主体的にワークショップに参加できるようになるということでもある。

二つ目の課題は、学生自身が英語を使う場面を増やすことである。学生アンケートで英語でコミュニケーションする力が最も低い自己評価（4.63）であったことは、ファシリテーション能力の成長に比べて英語力の伸びが実感しにくかったことを示している。次年度は、ワークショップの中に学生がより積極的に英語を使う場面を組み込んでいく工夫が必要である。

三つ目の課題は、単発の訪問を超えた学びの深まりの実現である。協力校から「実際の訪問は1回だとしても事前にオンラインで課題を提示したり共有したりして、その後双方の探究的な学びにつなげる」という提案をいただいた。この提案は、本事業の発展の方向性を具体的に示してくれるものであった。

6.3 次年度に向けた改善計画

これらの課題と、協力校・参加学生からの提案を踏まえ、次年度は以下のような改善に取り組みたいと考えている。

① 協力校との事前連携の強化 協力校の選定にあたっては、学校全体の受入体制と主体的な参加意志を事前に確認するプロセスを設ける。訪問前にオンラインでの打合せを複数回実施し、ワークショップの目的・内容・時間配分について十分な共通理解を図る。

② 事前のオンライン交流による学びの連続性の確保 児童生徒と大学生が訪問前からオンラインで交流する機会を設け、当日のワークショップを探究的な学びの成果発表の場として位置づける。これにより、単発のイベントではなく、継続的な学びのプロセスとして事業を構成する。

③ 学生の英語使用場面の拡充 ワークショップの中に、学生自身がより積極的に英語を使う場面を組み込む。学生の英語力向上と、児童生徒の英語学習への動機づけを同時に実現する。

④ キャリア教育的要素の充実 大学生の学びや進路選択について、本事業での龍瀬小学校の事例のように、児童生徒と共有する機会を設ける。大学生という存在が持つロールモデルとしての効果を、より意図的に活かしていく。

⑤ 準備スケジュールの前倒し 学生からの「準備期間が足りなかった」という声を踏まえ、教材開発やリハーサルのスケジュールを前倒しし、学生たちがより自信を持って現地に臨めるようにする。

おわりに

本事業は、鹿児島県離島振興協議会のご支援のもと、奄美大島の3市町村6校の先生方と児童生徒の皆さんのご協力により実現した。大学がない離島地域に大学生が訪れ、地域の文化を教材に双方向の学びを実践するというこのモデルは、離島教育の充実と地域振興の両面で確かな手応えを得ることができた。

初年度の経験は、うまくいったことも課題として見えてきたことも含めて、すべてが次年度をより良いものにするための大切な土台であるとする。協力校の先生方からは「可能であれば継続したい」「本プログラムを発展させることで、奄美大島の良さを発信できる」という声をいただいた。こうした声に応えていくことが、本事業の責任でもあると感じている。

参加した8名の大学生は、本事業を通じてファシリテーション能力、異文化コミュニケーション力、チームワーク力を大きく伸ばした。卒業後は、アメリカの大学への編入（4名）、国内大学への編入（1名）、教員（1名）、企業への就職（2名）と、それぞれの道に進んでいく。この多様な進路自体が、本事業を含む短大2年間の凝縮された学びの成果を物語っている。

なお、本事業で得られたデータは、今後学術論文として発表し、離島と大学が協働する教育モデルの可能性について検証していく予定である。この取り組みから見えてきたことを広く共有することで、同様の課題を抱える他の地域にも役立てたいと考えている。

そして次年度もこの事業を継続し、初年度の経験を踏まえてプログラムをさらに発展させていきたい。奄美大島の児童生徒と県短の学生が互いに学び合うこの場を、離島と大学が協働する教育のモデルケースとして着実に育てていくことが、私たちの目標である。

令和7年度 アイランドキャンパス事業 実施報告書
奄美と学ぶ、奄美で学ぶ～観光英語・異文化教育アイランドキャンパス～
鹿児島県立短期大学



せとうち海の駅にて

謝辞

本事業の実施にあたり、以下の皆様に深く感謝申し上げます。

鹿児島県離島振興協議会の皆様

奄美市教育委員会、龍郷町教育委員会の皆様

奄美市立朝日小学校の先生方、児童の皆さん

龍郷町立龍瀬小学校の先生方、児童の皆さん

龍郷町立龍南中学校の先生方、生徒の皆さん

奄美市立小宿中学校の先生方、生徒の皆さん

瀬戸内町立古仁屋小学校の先生方、児童の皆さん

奄美市立朝日中学校の先生方、生徒の皆さん

キルギス国立大学の学生の皆さん

学生の送迎等にご協力いただいた保護者の皆様

奄美大島で調査にご協力いただいた観光施設・文化施設の皆様

初めての取り組みに対して、限られた準備期間の中でも快く受け入れてくださった協力校の先生方、温かく迎えてくださった児童生徒の皆さん、そして遠方での活動を支えてくださった保護者の皆様。お一人おひとりのご協力がなければ、この事業は実現できませんでした。いただいた率直なご意見や温かい励ましの言葉を大切に、次年度はさらに良いプログラムをお届けできるよう努めてまいります。

鹿児島県立短期大学
文学科英語英文学専攻
異文化コミュニケーションゼミ
准教授 石井 英里子
2年 安樂 花音
石澤 悠生
大平 樹音
大迫 明日香
大重 優梨菜
玉置 遥菜
富 紗妃菜
森 雄琉

Learn together.
Grow together.
Connect across the sea.

